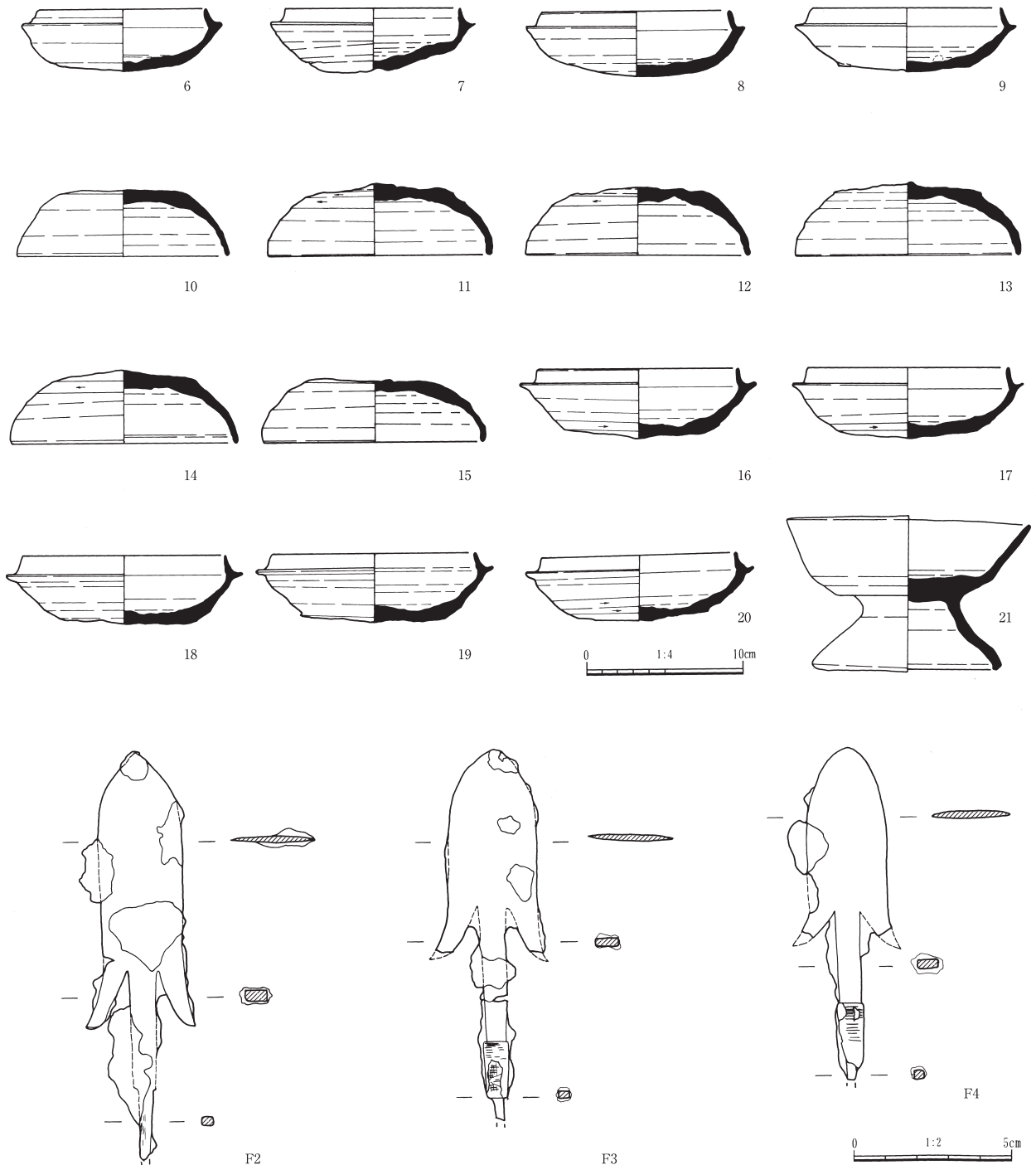


第1主体部(第12～15図、表2・12、巻頭図版3、PL.11～14・68～70)

墳頂部やや南寄りに位置する。古段階の盛土である43層上面から掘り込まれ、新段階墳丘の盛土に被覆されていることから、新段階の墳丘構築以前に築かれた埋葬施設である。墓壇の主軸はE-25°-Sをとり、長軸4.0m、短軸2.0m、深さ0.4mの隅丸長方形を呈している。埋土は上層から中位が橙色系で、東壁際から底面直上に黄褐色系が堆積していた。断面観察では木棺痕跡は確認できなかった。

遺物は墓壇のほぼ中央の埋土直上(4・5)と埋土中位(6)、底面付近(7～21、F1～4)で出土している。4は須恵器提瓶、5は短頸壺であり、いずれも墓壇検出面から出土していることから供献土



第15図 21号墳第1主体部出土遺物(2)

器と考えられる。底面上の墓壙中央東寄りから、須恵器坏身7～9と坏蓋10が伏せられた状態で出土している。須恵器転用枕の可能性もある。中央では墓壙主軸に沿って長さ90.4cmの鉄刀F1が切先を西に、刃部を内側に向けて配置される。刀身部は鞘の木質が部分的に残存し、刀身元部には鍔が認められる。鉄刀の茎尻部には3本の鉄鏃(F2～4)が鏃身部を東に向けて重なりながら出土した。このうち2点は柄木質上端部に樹皮による横位の巻締めが確認される。墓壙西壁際では、底面をわずかに掘削して人頭大の塊石を並列させ、その上面から側面にかけて2列6組の須恵器11～21が配置されている。当初は礫上面に全て配置されたものと思われるが、片側1列が土圧でずり落ちたようである。6組中5組が坏身に坏蓋内面を上にして重ねており、残りの1組は高坏21を正位に据えている。須恵器坏蓋は肩部に不明瞭な稜が作られ、口縁端部には弱い沈線が施される13・14が見られるものの、ほとんどが形骸化してしまってその痕跡を留めない。遺物の出土状況から、被葬者は南東を頭位として埋葬されていたものと考えられる。埋葬時期は、須恵器の特徴から田辺編年TK43型式並行、古墳時代後期後葉と考える。

第2主体部(第16図、表2、PL.15・71)

墳頂部やや東寄りに位置する。古段階の盛土である44層上面から掘り込まれ、新段階の盛土(22層)に被覆されていることから、新段階の墳丘構築以前に築かれた埋葬施設である。なお、本主体部と第1主体部とは掘り込み層および被覆層がともに異なっているため、この2つの主体部構築に時間差を想定することも可能である。墓壙の主軸はE-5°-Sをとり、長軸3.1m、短軸1.0m、深さ0.2mの隅丸長方形を呈している。埋土は黄褐色系の2層が堆積し、土層断面観察では木棺痕跡は確認されず素掘りの墓壙であったと考えられる。遺物は墓壙の東寄り、東壁から約35cm内側で、墓壙底面直上から須恵器坏蓋22と坏身23が伏せられた状態で出土している。このうち、22は口縁部が直線的に立ち上がり、肩部の稜が第1主体部出土須恵器に比べ強いことから、古相を帯びる。出土状態から転用枕と考えられ、被葬者は東を頭位として埋葬されていたものと想定される。須恵器の形態は田辺編年MT85(TK10新)型式並行までさかのぼる可能性があるが、本主体部が第3主体部(田辺編年TK43型式並行)に後出することから、埋葬は古墳時代後期後葉に行われたと考えられる。

土坑10・11(第17図、PL.20)

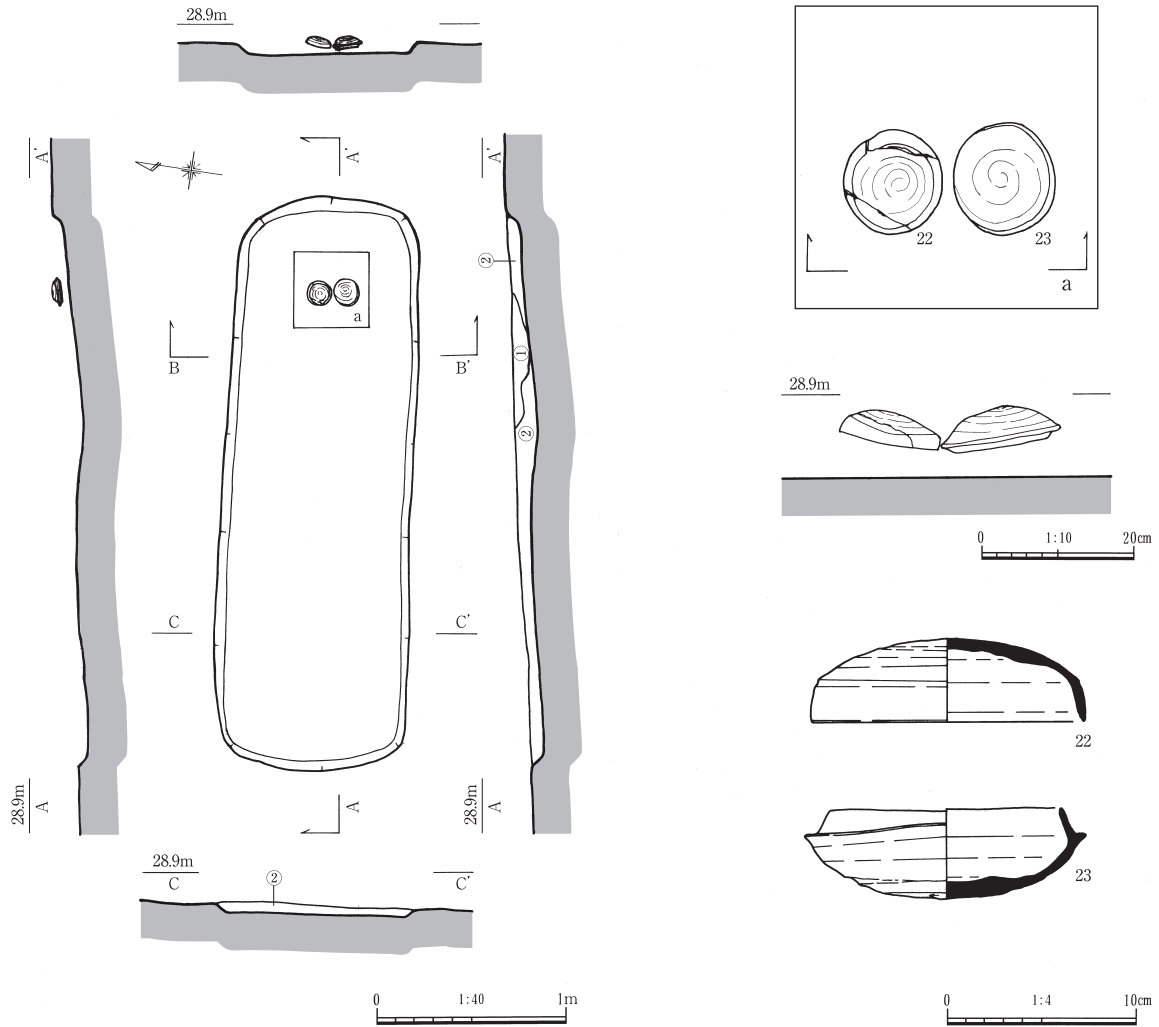
I6グリッド、21号墳墳頂部西側の標高約29mに位置する。表土・流土除去後、墳丘平坦面を精査中に須恵器を包含する赤褐色土の広がりをもつ2基のプランを確認したため、調査を開始した。調査時には、21号墳の主体部と想定したが、調査後の検討により埋葬施設としての根拠が乏しいと判断したため、西側を土坑10、東側を土坑11として取り扱う。

土坑10

第1主体部の北西約1.2mに位置する。南北軸と東西軸にそれぞれ2本のサブトレンチを設定して掘削を行った。長軸1.6m、短軸0.65mの長方形を呈し、検出面から底面までの深さは約10cmを測る。埋土は、地山礫を含む3層の赤褐色土から構成され、それぞれの層から須恵器の小片が出土している。遺構の時期は、21号墳新段階の墳丘構築後に掘削されていることから、古墳時代後期後半以降と想定する。

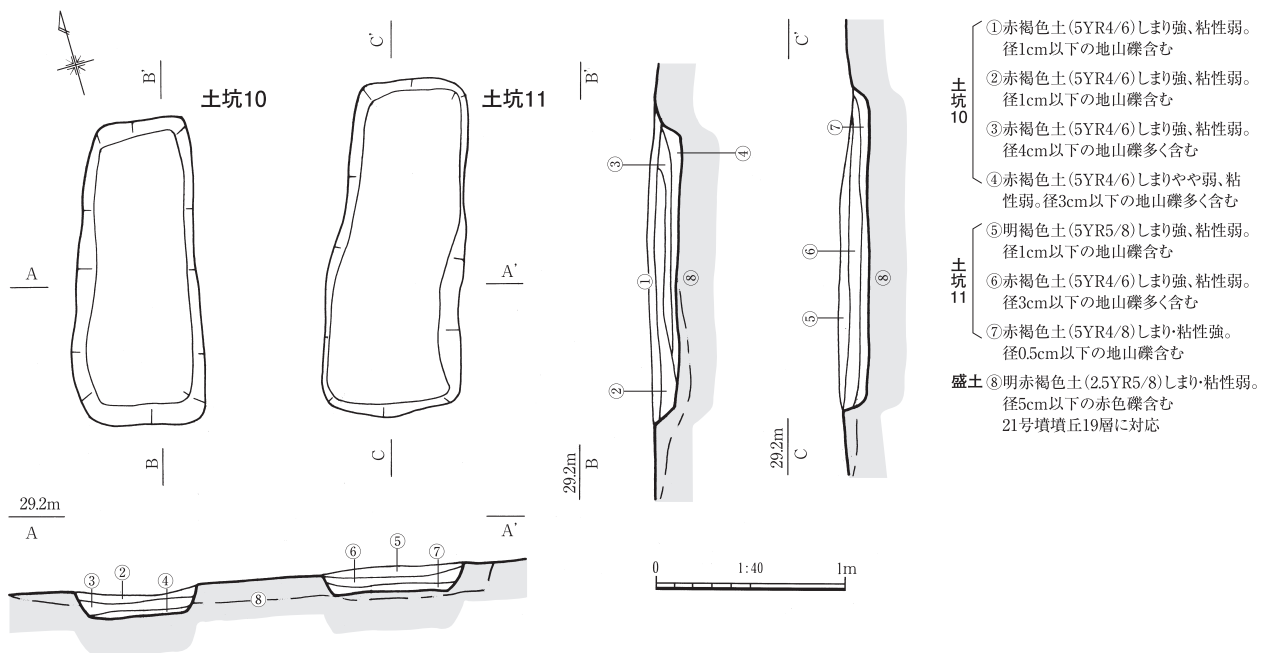
土坑11

第1主体部の北西約0.4m、土坑10の東約0.5mに位置する。東西南北軸にそれぞれ2本のサブトレ

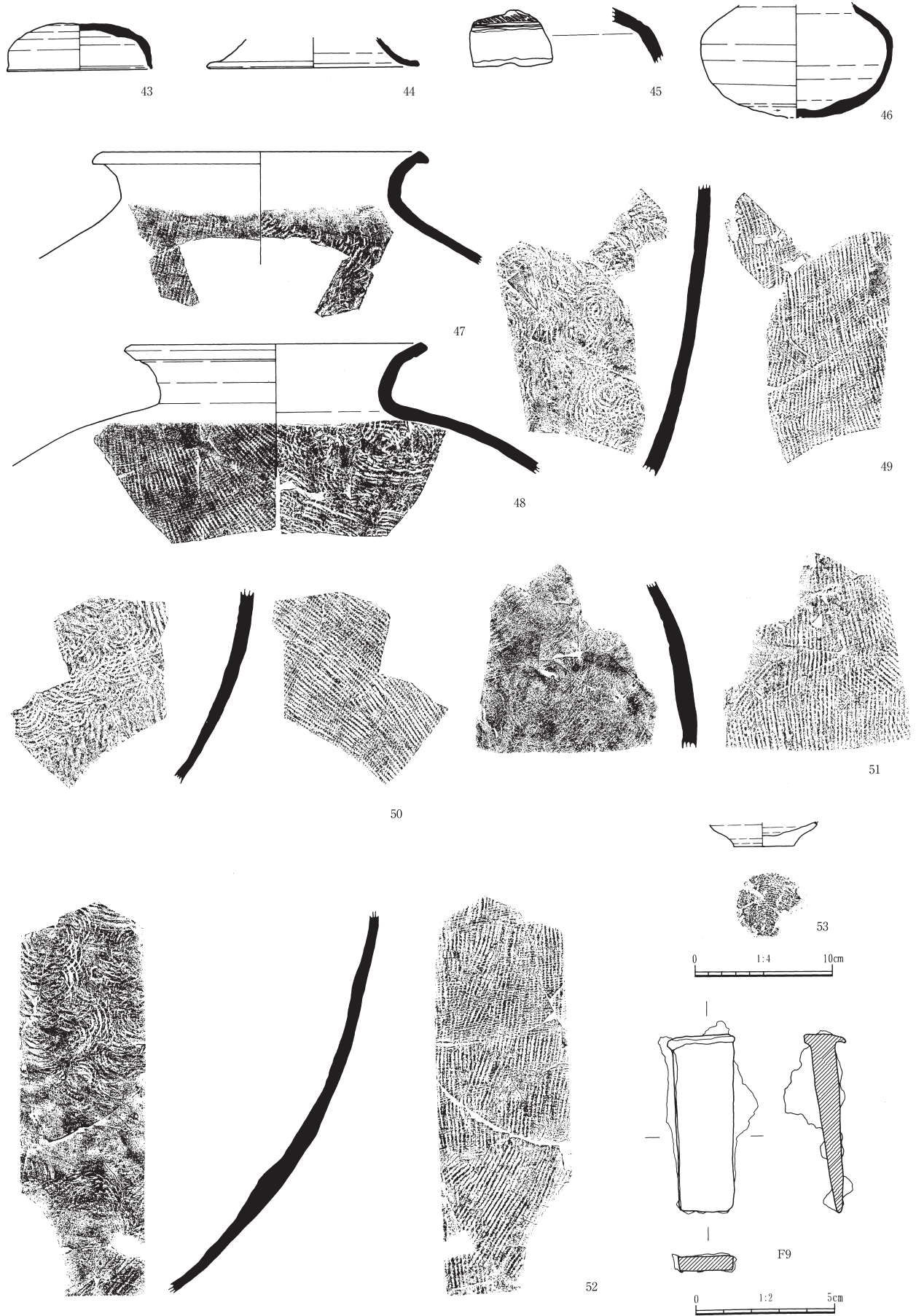


- ①黄橙色土(7.5YR7/8)しまり粘性弱。径1cm以下の赤色・黄色礫含む
- ②明黄褐色土(10YR6/8)しまり粘性弱。径1cm以下の赤色礫少量含む

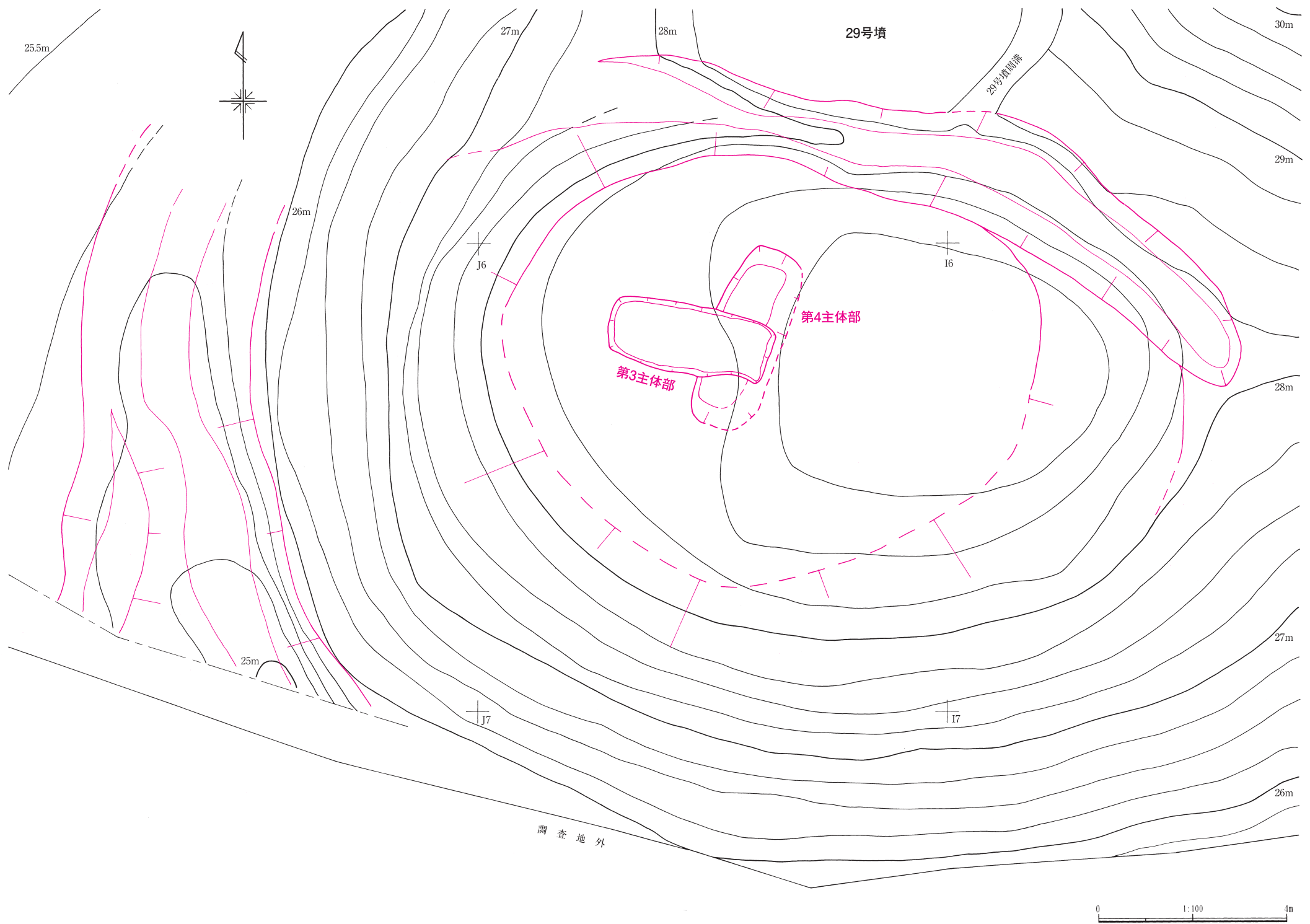
第16図 21号墳第2主体部



第17図 土坑10・11



第28図 21号墳墳丘出土遺物

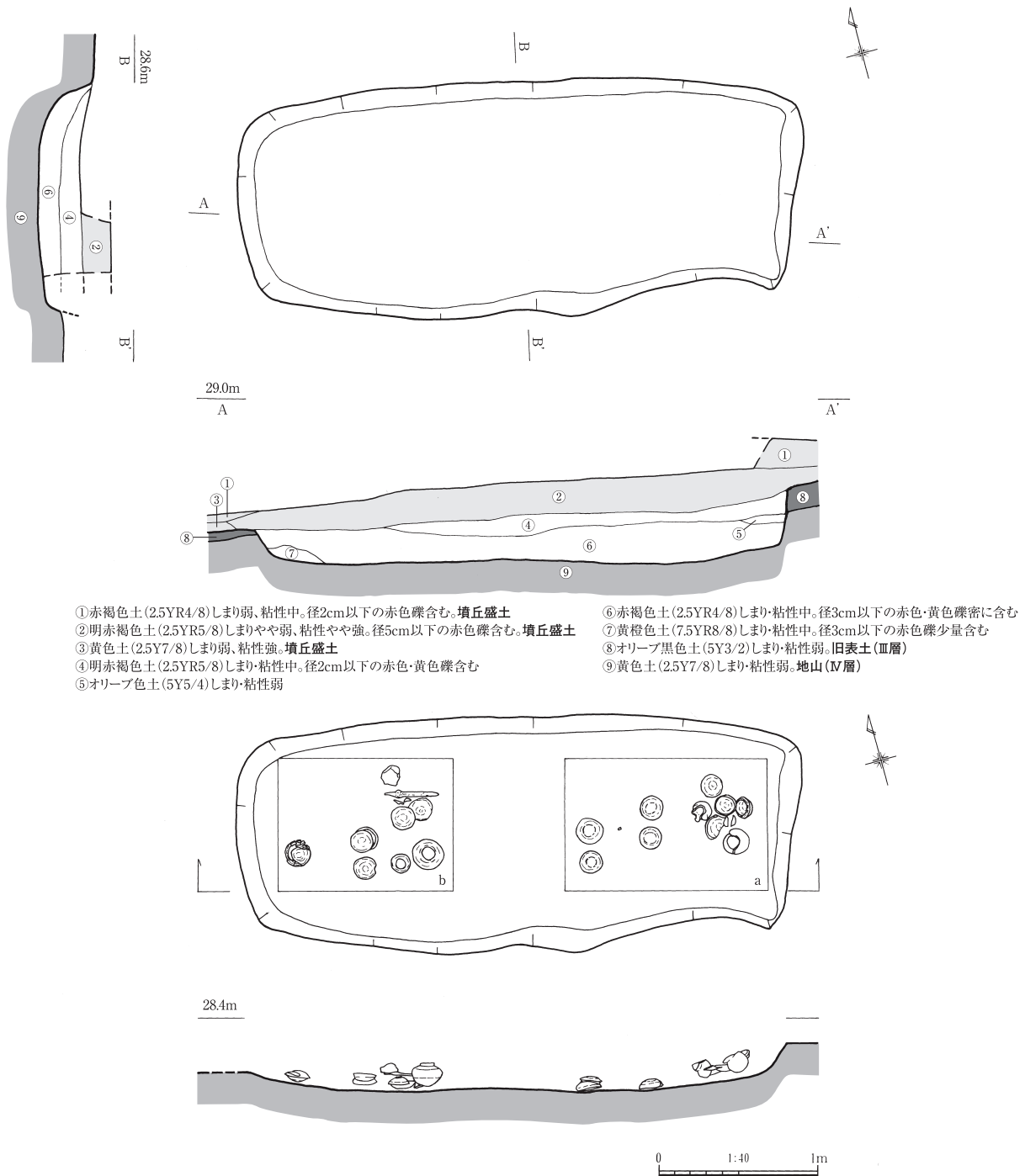


第18図 21号墳古段階墳丘平面図

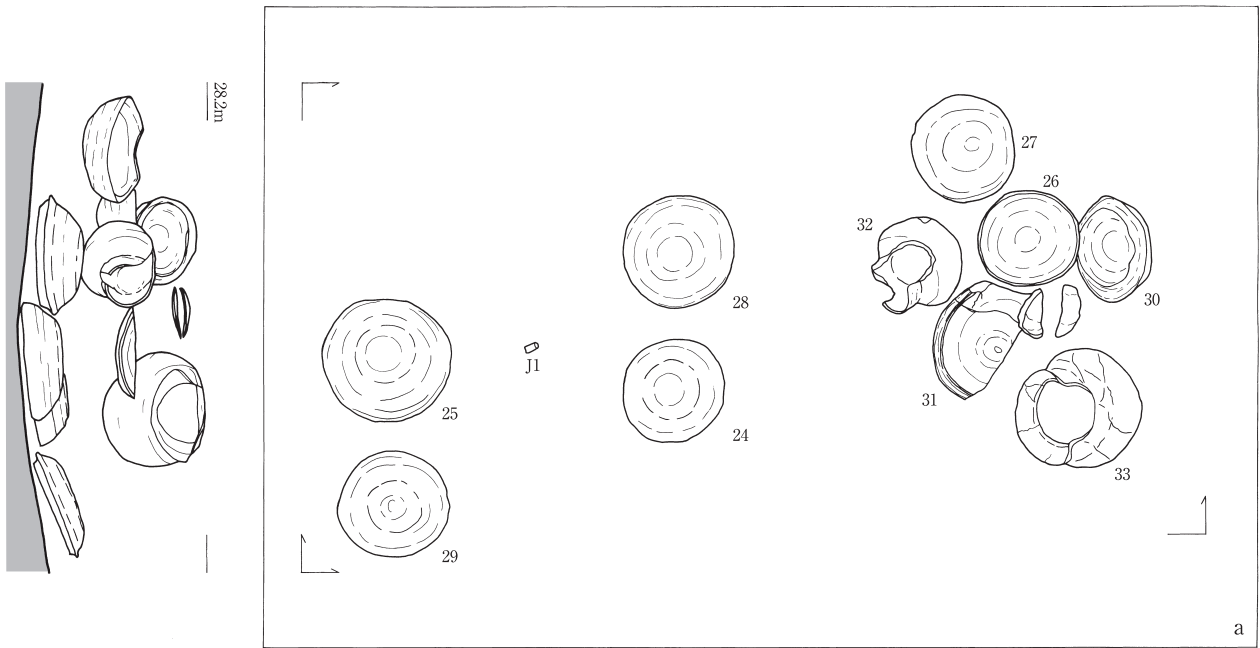
ンチを設定して掘削を開始した。長軸1.7m、短軸0.65mの長方形を呈し、検出面から底面までの深さは約10cmを測る。埋土は地山礫を含む明褐色土と赤褐色土から構成され、各層から須恵器の小片が出土している。遺構の時期は、土坑10と同じく21号墳新段階の墳丘構築後に掘削されていることから、古墳時代後期後半以降と想定する。

21号墳古段階(第11・18～26図、表2・3・7～10・12、巻頭図版4・5、PL.9・10・16～19)
墳丘

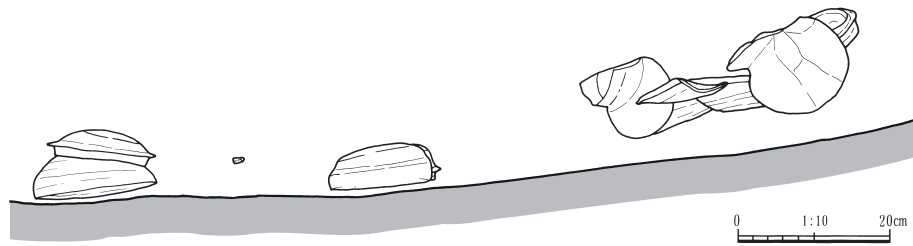
新段階の盛土および流土を除去した段階で古段階の墳丘を検出した。墳丘は、北側に周溝をもつ歪



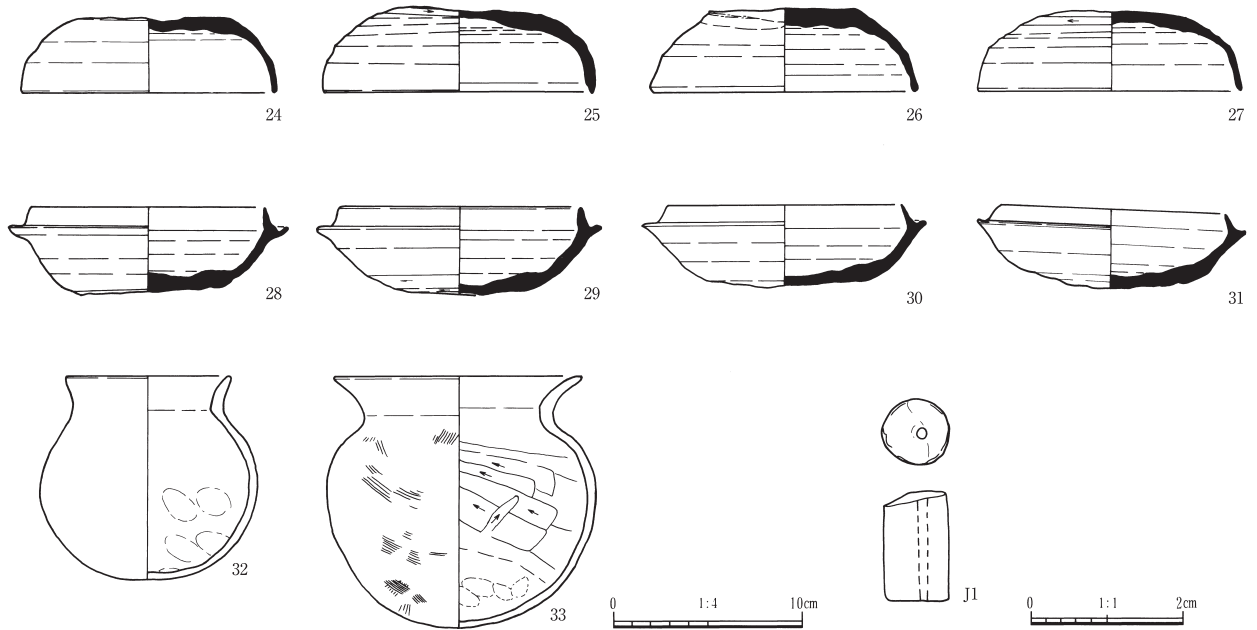
第19図 21号墳第3主体部



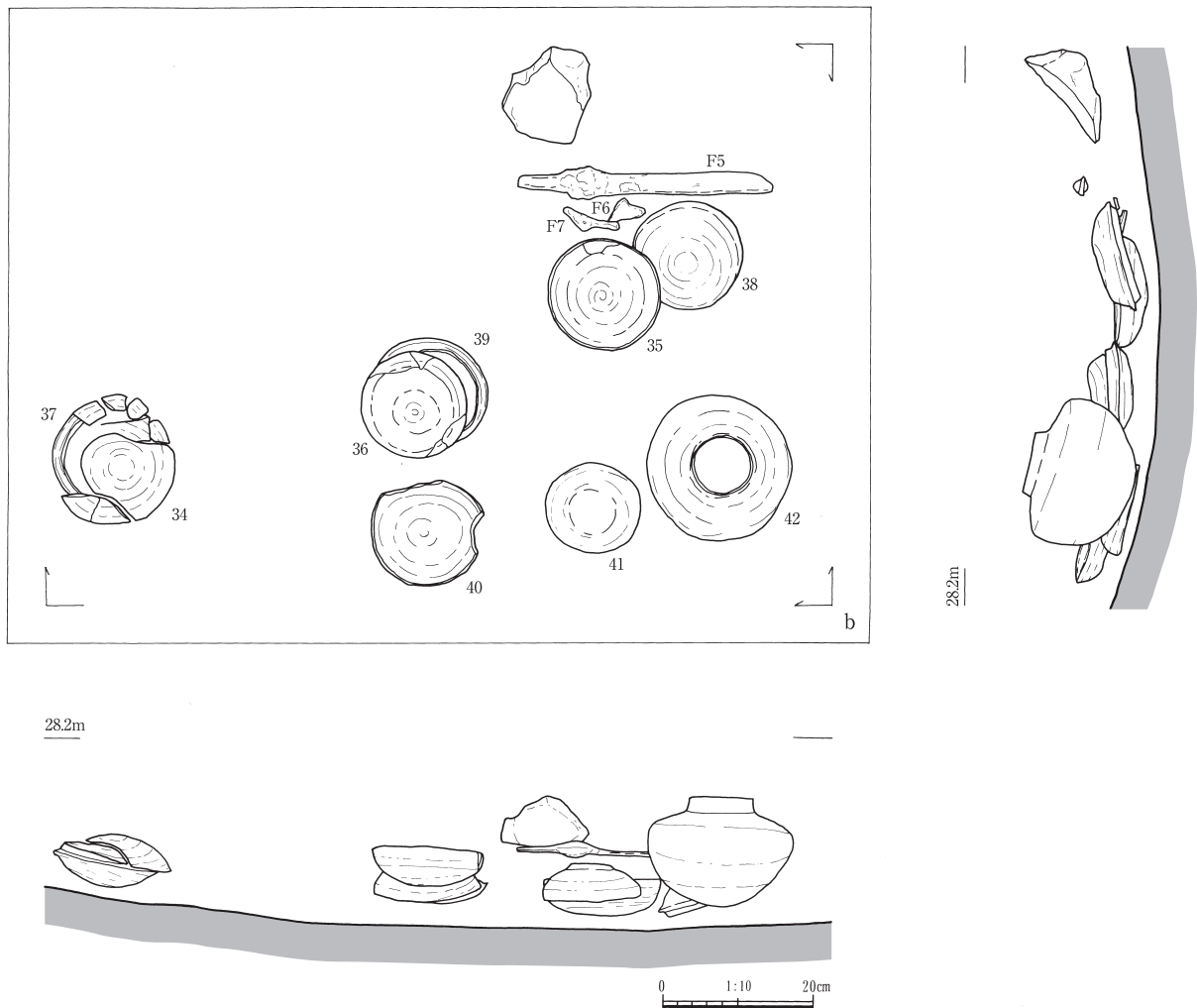
28.3m



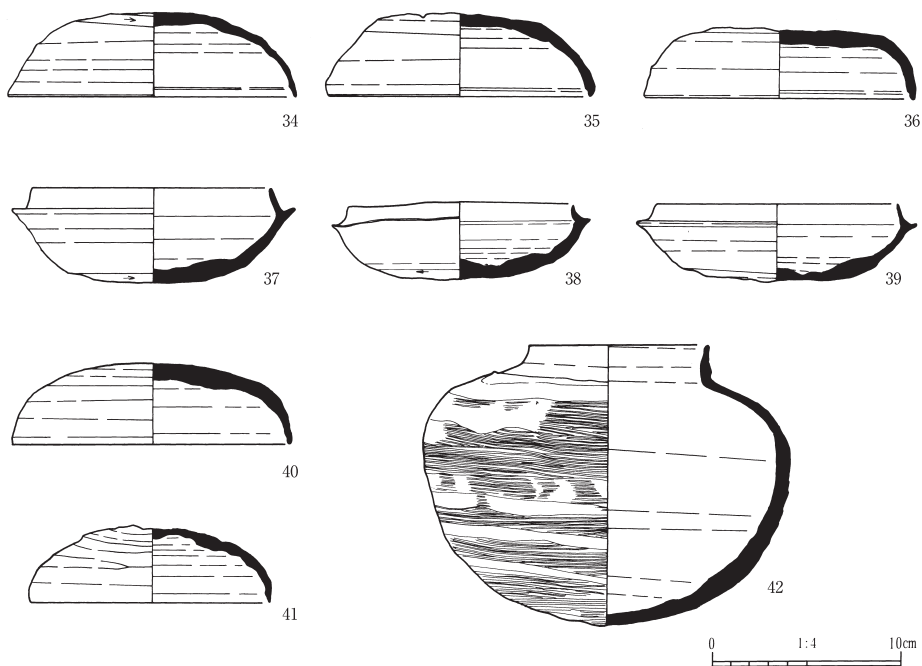
第20図 21号墳第3主体部遺物出土状況図(東半)



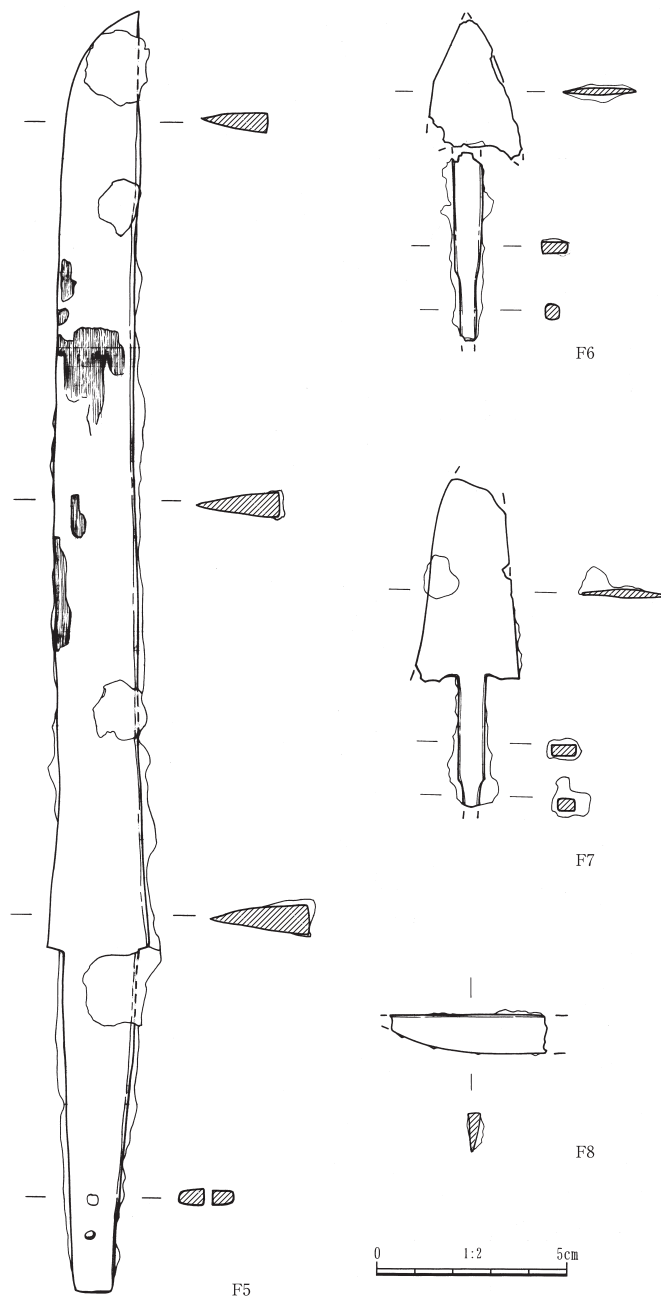
第21図 21号墳第3主体部出土遺物(1)



第22図 21号墳第3主体部遺物出土状況図(西半)



第23図 21号墳第3主体部出土遺物(2)



第24図 21号墳第3主体部出土遺物(3)

重複する。旧表土Ⅲ層から掘り込まれ、地山Ⅳ層と第4主体部埋土を底面としていることから第4主体部より新しく、古段階の盛土に被覆されていることから古段階の墳丘構築以前に築かれた埋葬施設である。墓壙の主軸はE-5°-Sをとり、長軸3.8m、短軸1.5m、深さ0.2mの隅丸長方形を呈している。埋土は墓壙中心部で明赤褐色土と赤褐色土、壁際でオリーブ色土と黄橙色土が堆積する。断面観察では木棺痕跡は確認できなかった。遺物は大きく墓壙の東西2ヶ所にまとまって出土している。東壁際では、底面から若干浮いた状態で須恵器坏蓋26・27、坏身30・31、土師器の壺32、甕33が副葬されていた。32は赤色塗彩がなされている。さらに約30cm内側から須恵器坏蓋24・25、坏身28・29が墓壙底面直上から、伏せた状態で出土している。24・28と25・29は坏身と坏蓋がセットとなっており、両者の間隙から碧玉製の管玉J1が確認された。また、墓壙埋土の水洗選別を実施したところ、管玉周囲の土壌を中心にガラス小玉55点、土製丸玉16点が回収された(第25図、第4章参照)。西壁際では、最

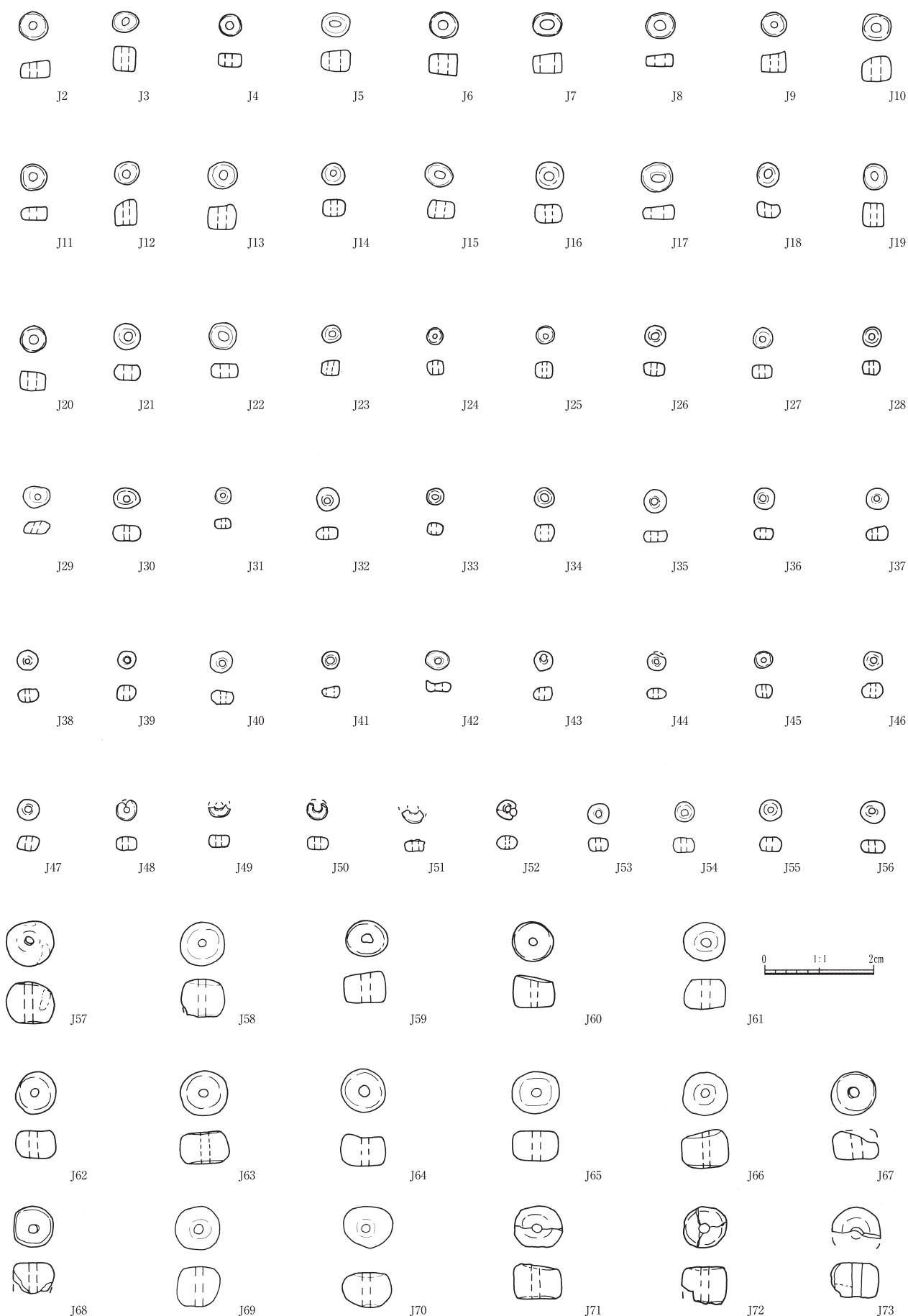
な楕円形を呈している。墳丘規模は東西約21m、南北約14m、周溝外側で東西24m、南北約16mである。墳頂部の標高は最高点で29.1m、東側の墳端からの比高差は約1m、西側の墳端からの比高差は3.6mを測る。

墳丘土層断面からは、墳丘中央付近で約20cm、南側裾部で約60cmの盛土を旧表土上に施していることが分かる。とくに墳丘の南側では旧地形上に厚く盛られ、盛土の作業単位が細かく観察できた。盛土を構成する土層は約10～20cmの厚さで、古墳周囲の地山から掘削した黄褐色土(地山Ⅳ層由来)と赤褐色土(地山Ⅴ層由来)を互層状に積み上げて構築している。墳丘東半は旧表土Ⅲ層と地山Ⅳ層上に薄く盛土を施しているのみで、自然地形をそのまま活かしている。

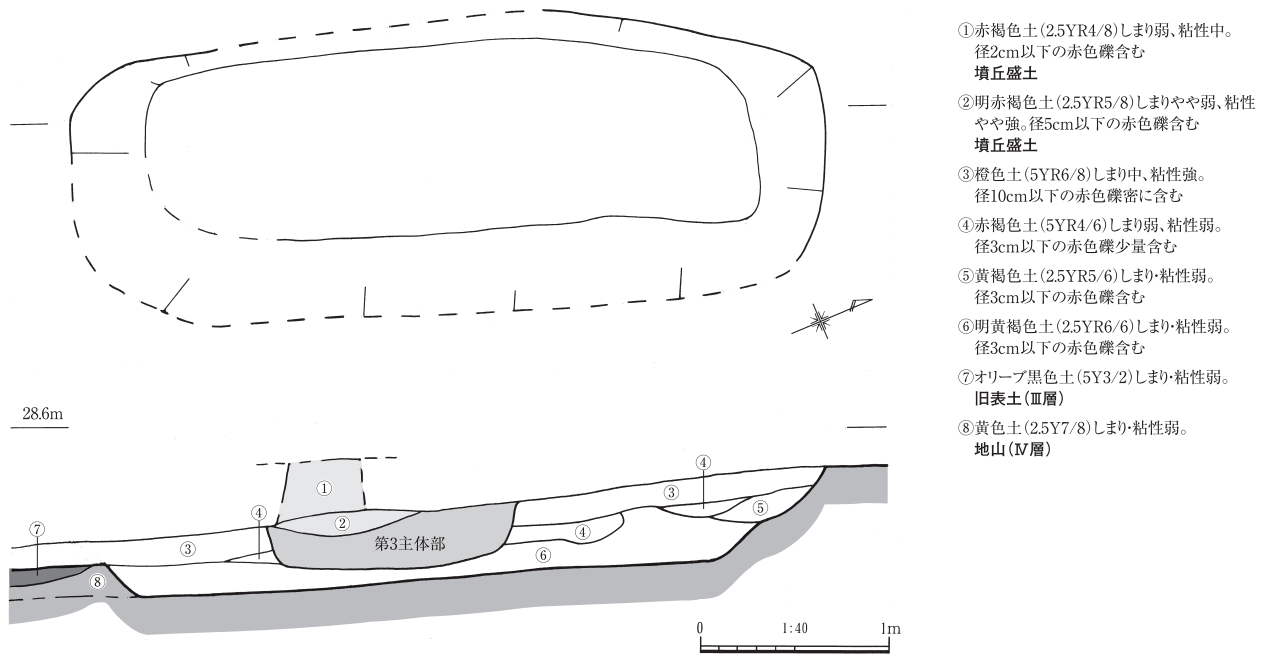
周溝は、墳丘北側で尾根稜線を断ち切るように深く掘削されている。溝の規模は最大幅約2.3m、深さ1.2mを測り、新段階よりも大きい。西側では幅広の不明瞭な周溝が掘削されており、さらにその西側に人為的に削平された可能性の高い広い平坦面が見られる。東側では周溝は確認されず、窪地化している自然地形を活かしている。

第3主体部(第19～25図、表2・3・7～10・12、巻頭図版4・5、PL. 16～18・71～74・84・85・94)

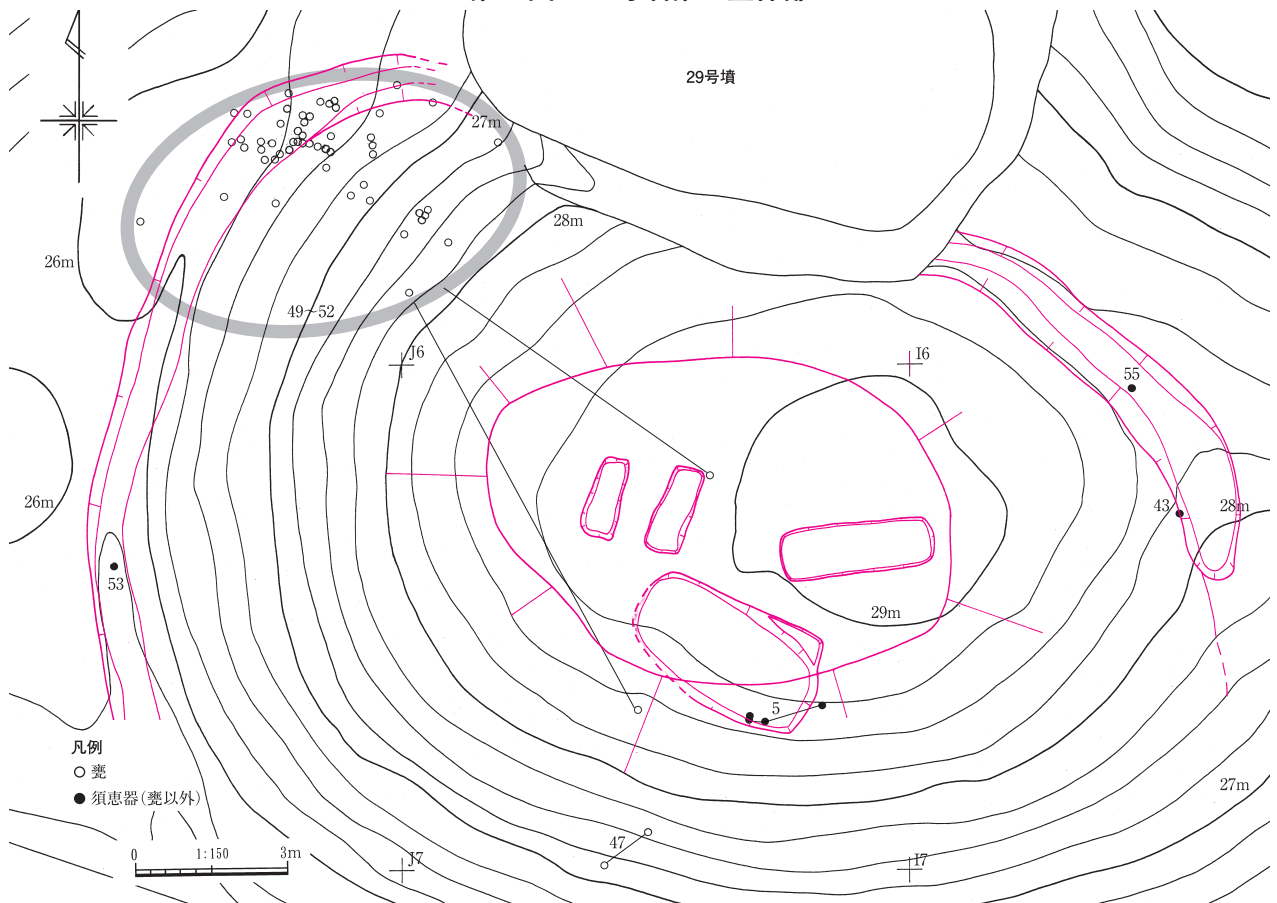
墳頂部やや西寄りに位置し、第4主体部と



第25図 21号墳第3主体部出土遺物(4)



第26図 21号墳第4主体部



第27図 21号墳墳丘遺物出土状況図

も西寄りに須恵器坏蓋34と坏身37が合わさった状態で配置され、さらに内側で須恵器を中心とした遺物がまとまっている。36・39は坏蓋・坏身であり、同じくセット関係を成している。坏蓋35・40は内面を上にしており、坏身38は伏せている。42は短頸壺であり、その脇に蓋41が置かれていた。墓壇主軸に沿って長さ33.7cmの鉄刀F5が切先を東に、刃部を北側に向けて配置される。刀身部には鞘木質

がわずかに遺存し、茎部に目釘孔が2ヶ所ある。鉄刀に隣接して鉄鏃F6・7、刀子F8が出土する。これら装飾品と鉄刀などの位置から、24・28が転用枕と考えられ、被葬者は東を頭位として埋葬されていたものと想定される。須恵器坏蓋は肩部に不明瞭な稜が作られ、口縁端部には弱い沈線が施される34・36などの、やや古相を帯びるものが含まれる。

埋葬時期は、新相を示す須恵器の特徴から田辺編年TK43型式並行、古墳時代後期後葉と考える。

第4主体部(第26図、PL.19)

墳頂部やや西寄りに位置し、第3主体部と直交する。第3主体部によって埋土の一部が掘削されていることから本主体部が古く、古段階の墳丘構築以前に築かれた埋葬施設である。墓壙の主軸はS-23°-Wをとり、長軸4.0m、短軸1.6m、深さ0.5mの隅丸長方形を呈している。埋土は墓壙中心部で赤褐色土と明黄褐色土が堆積するが、断面観察では木棺痕跡は確認していない。遺物は出土していないが、本遺構の位置と規模・形態、埋土の状況などを考慮し、埋葬施設と考える。時期は第3主体部構築以前であるが、両者に大きな時期の違いはないものと推定する。

墳丘出土遺物(第27・28図、表3・12、PL.75・76)

表土・流土中に墳頂部から西側墳丘裾部にかけて、破碎した須恵器甕片47～52などが多量に出土した。これらの須恵器は、墳丘南西から西側斜面を中心として飛散した状況で出土している。本来は新段階墳丘墳頂部において供献されたものと推定されるが、表土・流土中からまとまって出土していることから、後世に破碎したものと考えられる。43・44・46は新段階墳丘の盛土の中からの出土である。西側の周溝埋土からは、中世前期の土師器小皿53も確認されている。F9は墳丘北側の周溝埋土中から出土した鑿である。頭部の潰れが顕著であるが、全体の残りは良好である。

小結

21号墳では、古墳墳丘の増築に伴う「追葬」が確認された。古段階埋葬(第3・4主体部)は地山(旧表土)面から墓壙を掘り込み、その上に墳丘を築いている。新段階埋葬(第1・2主体部)は古段階に築いた墳丘上面から墓壙を掘り込み、その上に墳丘を築く。いずれも、墳丘を築いてから埋葬を行うのではなく、埋葬後に墳丘を築いている。主体部出土遺物と墓壙掘り込み面の検討から、初葬から最終追葬までの期間は、おおむね須恵器型式で1型式の範疇におさまると考える。したがって、本墳の墳丘構築時期は田辺編年TK43型式並行、古墳時代後期後葉としたい。

22号墳(第29～32図、PL.21～25・76・77・84・85)

位置と現況

調査区中央部のG4・5、H4・5グリッド、丘陵鞍部に位置する。22号墳の東には23号墳が、西には29号墳が、南には28号墳が近接して存在する。22号墳の立地する丘陵鞍部は、緩やかに西に傾斜しており、墳丘構築面の標高は30mを測る。墳頂部の標高は約31mである。調査前の地表面観察で明瞭な高まりが確認できたため、容易に古墳として認識できた。また、墳頂部中央には不整形な窪みが見られ、周囲から須恵器片が多く散見できたことから盗掘の可能性があった。

調査経過

22号墳と23号墳および28号墳との新旧関係を把握するために、それぞれの古墳間にトレンチを掘削し、土層の堆積状況を確認した。その結果、本古墳の築造は23号墳の流土堆積後に築かれていること

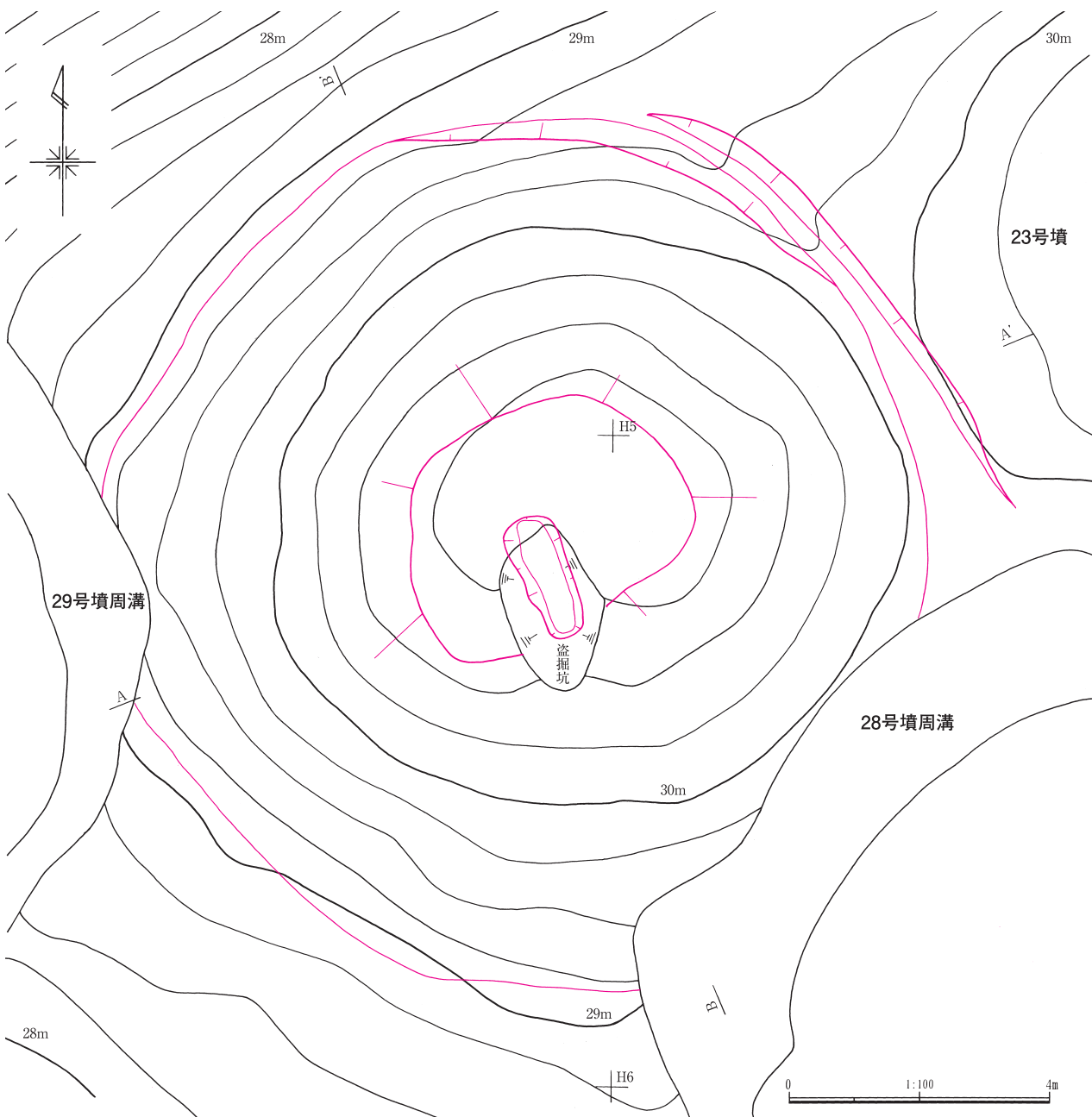
と、本古墳が28号墳の周溝に切られていることが判明したため、23号墳に先行して本古墳の調査を開始した。表土除去前に、尾根鞍部上の古墳を通して設定した東西ベルトと、これに直交する南北ベルトを設定した。その後、表土・流土を除去し、墳丘・周溝を検出した。続いて、主体部の調査、墳丘の断ち割り、盛土の掘り下げを行った。

墳丘

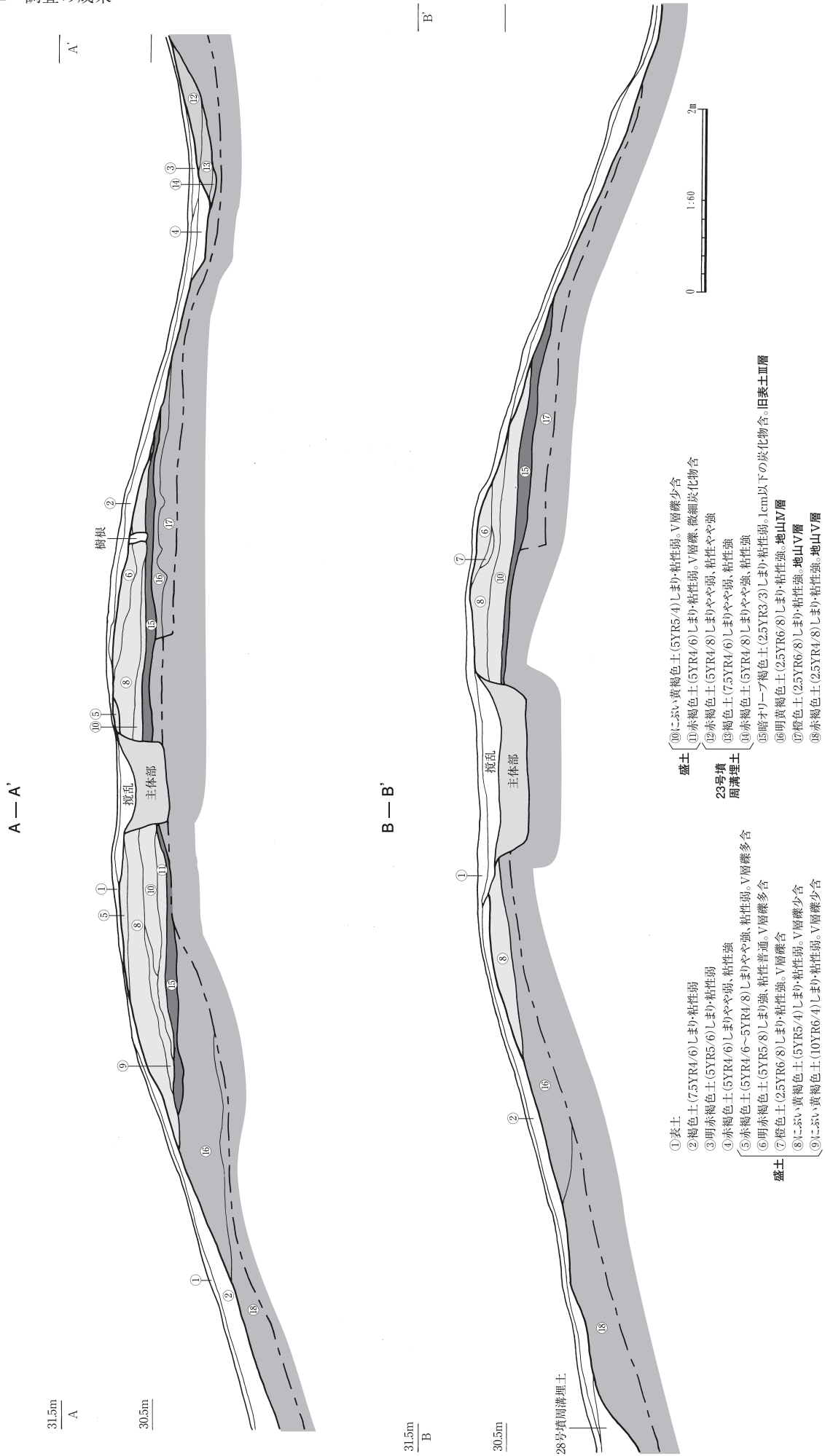
墳丘は東側に堀切状の周溝をもつ円墳で、墳丘規模は東西12.5m、南北13.5m、高さ1.75mを測る。墳頂部の標高は最高点で30.75mを測り、西側墳端と墳頂部との比高差が約1.7m、東側周溝底との比高差が1.3mである。周溝は幅約1.0m、深さ0.2mを測る。

墳丘裾部は、29号墳周溝と28号墳周溝に切れ、23号墳流土を切る関係にある。

墳丘は、地山掘削および盛土によって構築される。構築過程は、まず周溝掘削と墳丘裾部の地山削り出しを行い、その後掘削排出土を地表面上に盛土する。盛土(5～11層)の厚さは墳丘中央付近で



第29図 22号墳墳丘平面図



第30図 22号墳填丘土層断面図

最大0.5mを測る。各層とも20cm程度の厚さのやや大きい単位で施されており、大別して赤褐色系(地山V層由来)と黄褐色系(地山IV層由来)の2種類の土が用いられる。盛土の下には旧表土(15層)があり、これが古墳築造直前の地表面と考えられる。その直下に地山のIV層またはV層がある。

土層断面からは、盛土は数回の工程に分けることができる。①：墳丘西部分に土を盛る(11層)。②：墳丘東側の地表上および11層の上に土を盛る(10層)。③：墳丘全体に土を盛る(8層)。④：③の工程で歪んだ箇所(箇所)に土を補填する(5～7層)。

主体部

墳頂部南寄りの盗掘坑に堆積した攪乱土を除去した後、そのほぼ直下で主体部を1基検出した。土層の観察から、墓壙は盗掘時の掘削により上半部が失われていたが、下半部は良好に残存していた。

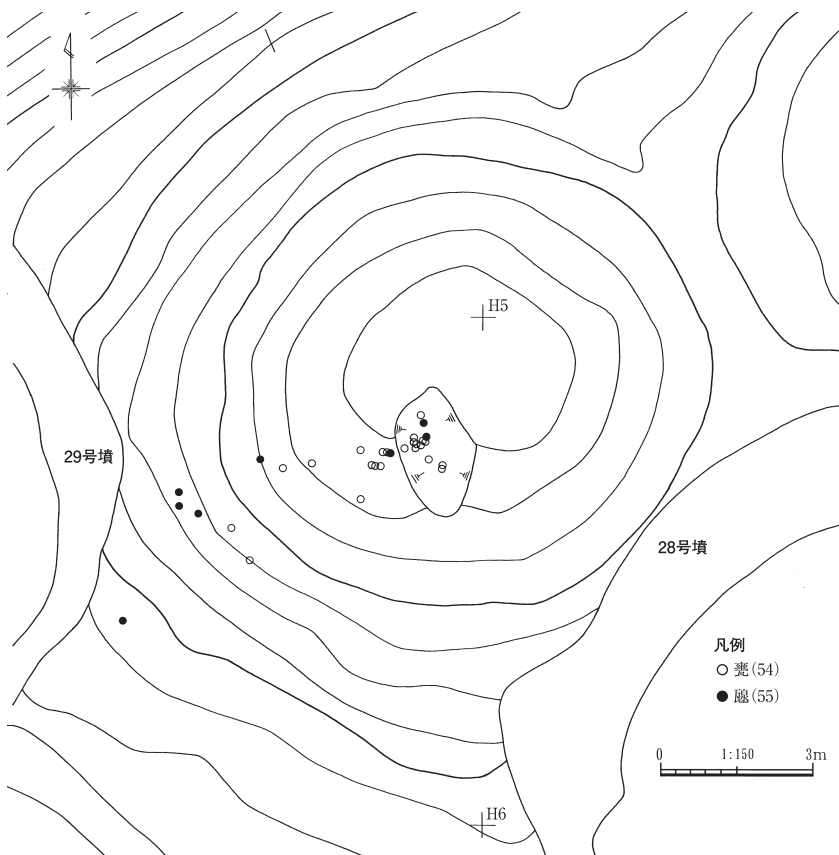
主体部は墳丘盛土上面(5層)から掘り込まれ、地山まで掘り込む隅丸長方形を呈する墓壙である。規模は墓壙底面で長軸1.84m、短軸0.5m、深さ0.5mを測る。主軸はN-22°-Eで尾根筋に対してほぼ直交する。明瞭な木棺痕跡などは平面でも土層断面でも確認できなかったため、素掘りの墓壙であったと考えられる。

遺物は、墳丘検出面から墓壙底面にかけて須恵器甕55、須恵器甕54が破片となった状態で出土した。その他、主体部からはF10～12が墓壙底面から浮いた状況で出土した。F10は棒状の鉄製品で、主体部出土のものと29号墳周溝埋土上層から出土した破片とが接合関係にある。F11・12は墓壙底面から浮いた位置で出土した。F11は端部を折り曲げており、F12は湾曲している。いずれも、小片で、形態は不明である。

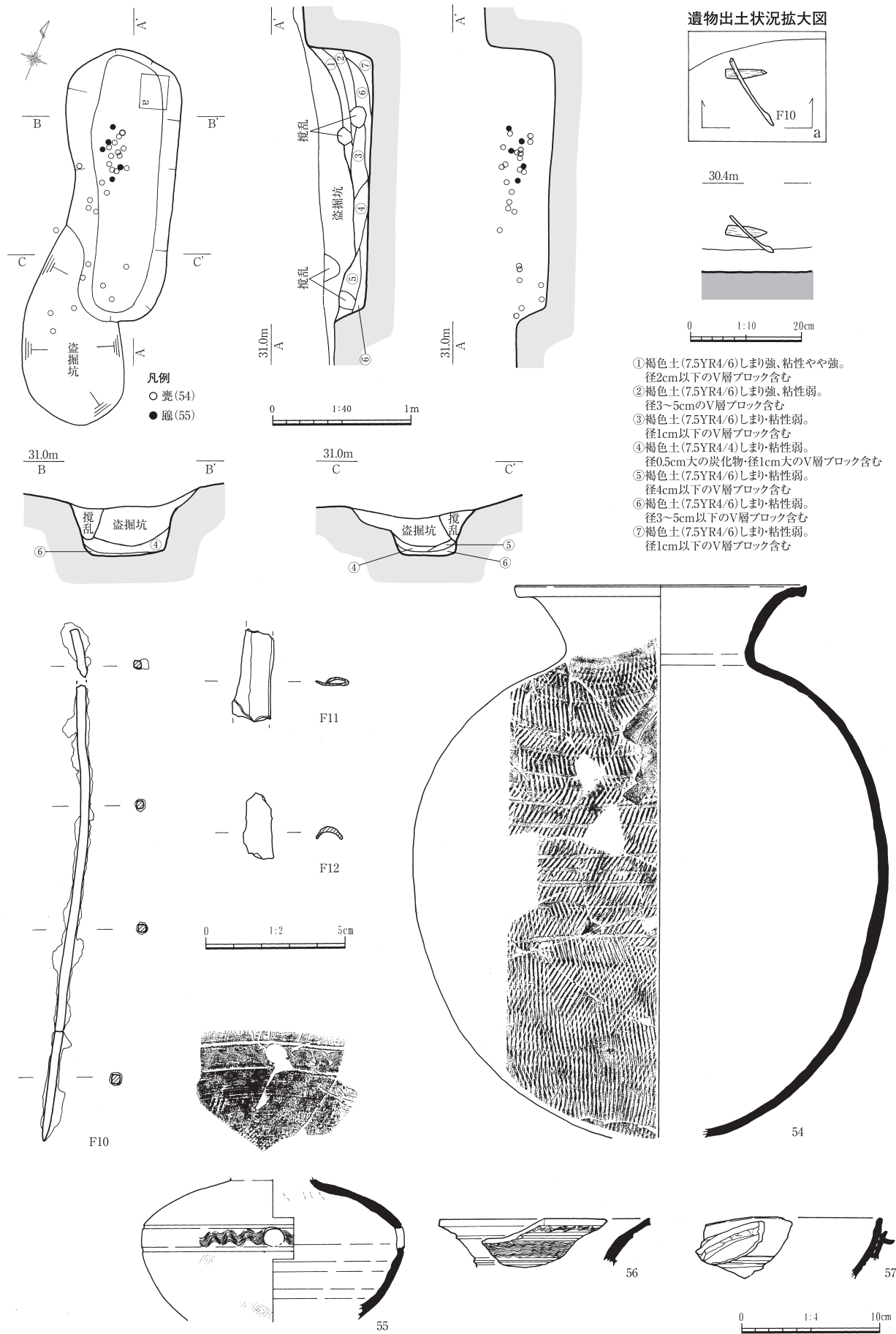
墳丘出土遺物

主体部より出土した54・55は、墳頂部から南半にかけて堆積した流土中より出土した破片と盗掘坑堆積土(攪乱土)より出土した破片とも接合関係にある。そのことから、54・55は、本古墳の主体部に伴う遺物であると判断した。盗掘坑は主体部中央底部付近まで掘られているが、それが及んでいない主体部北側の埋土中でも破片となって出土していることから、破砕された状態で墓壙上に置かれた可能性が高い。

54は須恵器甕で、外面は肩部から底部にかけてタタキ調整を施し、内面はタタキ調整の後に丁寧なナデ調整が認められる。外面のタタキ調整は肩部まで認められ、頸部から口縁部にかけてはナデによる調整が認められる。また、外面の肩部から体部上半にかけて、



第31図 22号墳墳丘遺物出土状況図



第32図 22号墳主体部および主体部・墳丘出土遺物